経済学新原論—その一

小林弥六

第一部　経済活動とは何か

第一章　本稿の目標

本稿の目標は経済理論の新しい体系を画き出すことにある。

九〇年代さらには二十一世紀以降を鳥瞰しながら、この新しい時代の人類の歩み、営み、思考の枠組み（フレームワーク）(frame-work)などの手掛かりを提供しようとするのである。

当然ながら、新しい経済学ないしは新しい経済理論（theory of economy）を築くことを目標にしている。すでに「新しい経済学ニューエコノミックス」（New Economics）の建設は七〇年代以来、世界中でもとめられ、その建設の必要がいろいろな人々によって唱えられてきた。

(注) 一例として、Daniel Bell and Irving Kristol, ed. the Crisis in Economic Theory, 1981.

またその試みも部分的にはいろいろと実行されている。

だが、私見によれば、かつてのA・スミスの『国富論』、K・マルクスの『資本論』、J・Mケインズの『雇傭・利子および貨幣の一般理論』などのように、新時代を思想・理論・政策面でリードして行く経済理論は建設されていないと考えられる。この判断に世界の世論も異存はないところだろう。言葉を変えると、現在は限界や欠陥が露わになったこれまでの経済理論、経済学ないしは経済思想、あえていえば中古品をあちこち補修して使い、教育し研究している状態といえる。

このことは、かりに正面切って云わないにしても、経済学者やエコノミストであれば、内心だれでも気付き感じているといってよいだろう。現代の他の多くの学問にも共通するといってさしつかえないと思うが、これまでのものの多くは率直にいってかなり金属疲労がきて古くなっている。時代と世界の変貌・発展が急テンポで激しく（一例をとると、ソ連邦の消滅や地球環境破壊など）、それに学問がついて行けない。

哲学や思想や考え方もそうで、いきおい言論やマスコミや政治や実業に携わる人々も場あたり的な言動を撒き散らし世紀末の混乱を楽しむかのようである。

大切なのは自暴自棄の混乱の増幅やその商品化や迷走、暴走ではない。正しい思想・理論・学問にもとづく正しき対応と建設なのである。

スミスも、マルクスも、ケインズもすでに大幅に過去のものになっているとすれば、われわれはオリジナルの手造

りの新しい経済学・経済理論を作り上げるほかない。もちろんこのことは過去の学問的な遺産をすべて棄てることを意味しない。むしろ逆で過去の人類の、世界の学問・思想の生かせる点は生かし、かつオリジナルな学問という製品を作り上げるのである。といっても、そこに一種の飛躍ジャンプがなければ、新しい学問や思想を作り上げることにはならない。新たな創意工夫の努力がおこなわれるということである。自動車や各種機械と同じで、中古品だけでなく、新製品製作を目指すのである。

ここまで書き進んで筆者は一冊の書物を開いた。そこには、ある人が「夜は煙って、昼は燃える蟻塚」を見つけ、賢者の指示で剣をとって深く掘り進んだ。すると「はじめにかんぬきが出、次は水泡、次は刺又（さすまた）、それから箱、亀、手殺しの刀、一片の肉が次々に出、最後に竜が出た。」そこで、また賢者に聞くと「それらのものをみな捨てよ。ただ龍のみをそのままにしておけ。龍を妨げるな。」と答えたというと書かれている。（『仏教聖典』仏教伝道協会）

剣とは「清らかな知慧」のことだという。前に出てきたものは、「貪むさぼり・嗔いかり・怠り・浮わつき・悔い・惑い」なのだそうだが、筆者のインスピレイションでは人類の体験・想い・思想・学問・経済学のような気もする。

筆者がこの六十年弱おこなった世界探訪、観察や学習・研究は、全体としてこの「蟻塚」のような気もする。そこで、本稿を書き綴る作業はいわば、この「蟻塚」を学問探求と思索という剣をもって「深く掘り進み」この龍を掘り出す、龍を見るというこれまでの営みを、文章化し論稿とすることにあたるのだなという気もする。「龍のみをそのままにしておけ。龍を妨げるな」と賢者（仏）は語ったという。本稿が経済学・学問という蟻塚から掘りあてたものがさいわいにして龍であるならば、それは九〇年代以降の日本、世界、人類をリードする理論・思想になりうるものであって、筆者の喜び、これに優るものはない。「みな捨てよ」ということで、捨てるものも多いが、読者の御寛容を願

うのみである。

そのようなわけで本稿の目標は、経済学（さらには諸学）の森、パズル、蟻塚の中から掘り出した新しい経済学を叙述することである。

第二章　経済活動の既存の理解

結論を先取りしていえば、経済とは何かにかんする理解が、現代、近代では非常に歪んでいるということである。経済学でも実業界でも大変な誤解がまかり通っているということである。この錯覚から抜け出さないと認識も改まらないし、経済が改善され発展することもない。

経済的ということで、最近は節約になるとか、効率的であるとか、いろいろなことが意味されている。これらは、経済のある側面に注目しての用語であろう。

それはともかく経済は学問的にどう把えられているか。例えば、A・スミスは有名な『国富論』(Wealth of Nations)を次のように書き出している。「すべての国民の年々の労働は、本来その国民が年々消費するところのあらゆる生活の必需品と便益品とを供給する資源（fund）であって、その必需品と便益品とは、この労働の直接の生産物であるか、あるいは、その生産物を以て他国民から購入した物である」（大内兵衛訳　岩波書店）。経済とは「必需品と便益品」つまり財貨の生産、交換、分配、消費だと考えられ、交換価値や貨幣をも含めて財貨(goods)に関わる活動だと考えられた。これが現代の経済学での経済観の基調音となって鳴り響いている。経済学だけでなく、経済・実業活動にもこの理論ないし思想は甚大な影響を及ぼしている。

D・リカードは、「土地の生産物――即ち労働と機械と資本との結合投下によって、土地の表面から取得さるる一切のものは、社会の三階級の間に分たれる」（『経済学及び課税の原理』）とその主著を書き出しており、また、「この分配を左右する諸法則を決定すること、これが経済学の主要問題たるものである」と記している。ここからも判る通り、経済は財貨の生産と分配、消費の活動や交換価値のことだと考えられ、そう主張されている。ついでながら記すと、リカードにおいて経済学はそのような財貨の生産、分配、消費や交換価値、さらには国富の増進のための政策などを研究する学問だと考えられ、そのように論議されている。

さらにK・マルクスについてみよう。その主著『資本論』は次のように書き始められている。「資本主義的生産様式が支配的に行なわれている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる」

「商品は、まず第一に、外的対象であり、その諸属性によって人間のなんらかの種類の欲望を満足させる物である」（『資本論』岡崎次郎訳　大月書店）

富は「商品の集まり」であり、商品は物である、つまり財貨であると考えられている。そして、『資本論』で説かれているのは、財貨の生産やその使用価値や交換価値や、その分配、流通、投資などの事柄である。要約すると、経済は財貨に関わることと考えられている。

念のために、今日までの経済学の流れを代表する幾人かの学者の論じるところを引いて置こう。P・A・サミュエルソンは次のように説いている。

「経済学とは、ひとびとないしは社会が、貨幣の媒介による場合、よらない場合いずれをも含めて、いくつかの代

替的用途をもつ稀少性のある生産資源を使い、さまざまの商品を生産して、それらを現在および将来の消費のために社会のいろいろなひとびとや集団のあいだに配分するうえで、どのような選択的行動をすることになるか、ということについての研究である。それはまた、資源配分の態様を改善するにあたっての費用と便益を分析する」（『経済学』岩波書店七頁）。

要するに、資源、効率、交換価値、配分などに関わることが経済活動だと考えられている。またそのような考え方が多数の人々に説かれ、教えられ、かつ受容されて、大きな影響を与えたのである。

経済とは、主に財貨ひいてはサービスを稀少性がある資源、資本、労働を用いて、生産しかつ分配・消費する活動だと考えられている。幾分か総括的にいえば、経済はいわば財貨、物質に関わる活動だと解されてきた。

同じ判断はいわゆる近代経済学の有力な基準とされるライオネル・ロビンズの『経済学の本質と意義』にも正面から展開されている。宇沢弘文教授によれば、それは次のようである。

「科学としての経済学はつぎのような性格をもつ。すなわち、経済学は、与えられた目的を達成するために、さまざまな希少資源をどのように配分し、どのような制度的、技術的手段を選択したらよいか、という問題を考察する。このとき、さまざまな目的と選択された手段との相互関係を分析することはあっても、どのような目的を選択したらよいかという問題にかんしては、もはや経済学の関与するところではないとする」（『近代経済学の再検討』八五頁）

そのようなわけで、経済とは財貨に関わる活動だというのが常識的な考え方となってきた。

ただこれはいささか平板な見方の面があり、経済とは何かをもう少し突っ込んで考えてみる必要がある。

希少資源の中に通常は労働と天然資源が含まれており、また資本が含まれている。つまり労働と資本と資源とが生

産の三要素といわれ、これらが用いられて、財貨さらにはサービスの生産がおこなわれる。もちろん資本が先行する生産の生産物で、具体的には機械や道具や原料だというようなことはある。またそれらの生産に労働や資源がおおいに関わっていることは、否定できない。資本のほかに労働や資源の生産要素（factors of production）があるということの意味を、もっと突っ込んで理解しようとした一例に、マルクスがある。

「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である。この過程は人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材に対して彼自身一つの自然力として相対する…。」（『資本論』前掲、邦訳①二三四頁）。

ここでは人間と自然との間の物質代謝ということがいわれており、農業でよくわかるように人間が経済活動によって自然（土地）から食料を生産し取り出し、生活によって消費し、これを自然に帰すというイメージが想い画かれているといえよう。重工業などになると、自然から資源（例えば鉄や石油）を取り出し加工し、製品を作り、それを消費して生活を維持する。この場合に自然を損壊したり汚染したりすることなくこのような経済活動ができないという意味では、「人間と自然との間の体質代謝」という言葉は一部あたっており、またそういえない面もある。その典型が最近、世界の耳目を集めている環境破壊・生態系破壊などである。のちに述べるように工業にはいろいろな意味で、自然さらに進んでいえば地球の破壊と廃棄物の創出という副作用がある。

第三章　経済活動とは社会・文化活動

ところで二十一世紀を目前にする今、かつての叙上のような「経済観」は根元的といってよい見直しを迫られてい

る。

これまで常識と思われた経済観は、かなりの非常識だったかもしれぬ。

経済とは、はたして何だろうか。

結論をやや先取りして記そう。

経済とは今まで紹介してきたような、物資の生産と消費のシステムだとつかみきれるものではない。もしそうだとすると、これまでの大半の経済学は、経済の本質を摑みきれなかったことになる。すると、あらためて経済(economy)とは何かの追求が必要になってくる。

考えてみると、経済活動はいろいろな要素と交流し、交錯しつつおこなわれる。

① 人間の生活と、人々の接触や協力・協同などの人間の社会生活

② 地球や太陽、宇宙などの自然

人々は生産と消費の活動をおこなうが、これは人間の個人生活上の営みに関わることはもちろん、①の社会生活や②の自然、地球、太陽などとも深く関わっている。①の社会生活についていえば、経済活動は複数の人々の協力や分業によっておこなわれなければ通常困難なこと、さらに人間の生活は家族、種族、村落・都市・会社・官庁などの社会生活ないしは集団生活によっておこなわれることに関係する。もちろん個人ないしは個体の生命活動・生活はあるのだが、これもそのような社会生活・集団生活と複合して生活が営まれるということである。

②があるということは、経済活動・経済生活をおこなうのにたんなる「土地」(land)や「資源」(resources)にとどまらず、ずっと広大な自然条件が必要だということである。

端的にいえば、太陽の光やエネルギーの恩恵にあずからねば、人間は生きられぬし、したがって生産も消費もすることができない。作物も育たない。家畜の飼育もできない。

このようないろいろなベクトルと交錯しながら経済活動がおこなわれるということは、それがいわゆる経済活動（いわばたんなる財貨の生産と消費という物資をめぐる活動とでもいうもの）としてのみおこなわれることがないことを示唆する。経済は無数といってよい程の多数の変数の函数として実行されるといってよいかもしれない。

経済活動は人々が地球上で、広くは宇宙の中で、人間の本性にもさまざまに絡みつつ、社会生活を実行するなかでなされる活動だといえよう。

その意味では、かなり文化的な行為だといってよく、実際、人間はいろいろなことをイメージでき、表象を画き、目標を定め、それを作り出す努力をすることができる。頭脳の働きをはじめ、手も器用に使うことができる。また、人間が社会生活のうえでする、分業によっての協力、水路や道路の建設などの共同作業をする協力や情報の相互伝達、仕事の面での往来・接触、祭り・フェスチバル、パーティー、祭祀や事業、親睦旅行、趣味の活動、スポーツ、レクリエイションなどと経済行為とは絡み合っている。

経済とは本来このような人間的な行為なのだ。これまで経済学が理解し教えてきたように、たんに財貨を生産し、分配し、消費するというだけの行為・活動ではないのだ。

A・スミスは「かくして労働は、最初の価格であった、あらゆる物に対して払はれるところの本源的購買貨幣(original purchase-money) であった」と述べており、人間の労働が経済活動において占める意義を重視している。

K・マルクスはそこをもっとつめて、人間の意識性にもとづく労働実践こそが人間の生命活動の中核だと論じてい

る。

「第一に、人間にとって、労働、生命活動、生産的生活そのものが、たんに欲求を、肉体的生存を保持しようとする欲求を、みたすための手段としてのみ現われるからである。しかし〔真実のところをいえば〕、生産的生活は類生活である。それは生活をつくりだす生活である。生命活動の様式のうちには、一種属〔species〕の全性格が、その類的性格が横たわっている。そして自由な意識的活動が、人間の類的性格である。ところがこの生活そのものが、もっぱら生活手段としてだけ現われるのである」（『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳　岩波書店　九五頁）。

経済的行為はたんに「肉体的生存」を維持するためにだけあるのではなく、人間の生命活動であり、マルクスが強調する「類的存在」（Gattungswesen）としての、人間にとって大変に重要な意味をもつ行為なのだ。

物資がなければ人間は生きられない、いろいろしたいと思うこともできない。したがって、財貨さらにはサービスの生産や供給は必要だ。それゆえに、労働をはじめとする経済活動は大切だ。

だが、それだけではない。われわれ個人が意識をもち計画を立てそれを実行するために、われわれに賦与されている能力を用いて労働する、勤めるということも、われわれの精神と肉体に活力を与え、向上させるのに大いにあずかって力あるのだ。労働せず、遊び暮らすだけでは、人間は怠惰になり堕落してしまう。

スポーツや趣味、レクリエーションだけやっていてもおそらく人間はどこか緊張を欠く部分がでてくる。適正な労働をすることは人間にとって心身両面に良き効果を斉らし、また喜びの源にもなる。われわれ人間にそなわっている、「自己実現欲求」を充足することにもなる。

われわれ人間がたまたま肉体をもち物質界に生きているところから、財貨を必要とし労働も必要になる。労働はと

きに緊張や苦痛をともなうこともあるけれど、それがバネになって心身両面の錬磨と健全化がもたらされる。

労働は人間にとって神聖な意味をもつ。かつてヘーゲルはこのようにいった。

「労働は此岸的な〈自己一物一化〉である。労働において私は私を直接的に物に化する。私の定在を自己外化し、それを私にとって疎遠なものたらしめ、しかも、それのうちで私を保持している。まさしくこのもののうちに、私は自分が承認されてあることを直観する」（『実在哲学』II）

労働は本来、きわめて人間的な行為である。さらに進んでいえば、人間が人間として生きるために非常に大きな意味をもつ行為である。たんに物資を得るということを越えて、文化的ないしは芸術的な行為だということができる。このことは、もちろん「過労死」するまで酷使されるとか、人間が機械（技術）という王様に奴隷のように酷使されることが「神聖」だというつもりではない。

労働という行為や経済行為は、本来が神聖な行為だ、祈りにも通じる行為だといいたいわけである。既述の通り、それは人間の内奥の欲求につうじるものでもあるし、自己実現につうじる。したがってまた人々の文化的欲望に通じ重なり、芸術的欲望にも、また設計・計画・経理の行為にもつうじる。

生産が資源・自然を利用することではじめて可能になり、また人間が自然の一部分であることからしても、経済行為・経済活動は天地自然の恩恵を離れてはありえない。この天与の環境の中で、それを利用することによって経済活動が成り立つということは、経済がきわめて自然的な行為であることを示している。機械化され人工的な経済だと思っているものも、じつはそうではない。宇宙・自然の諸力・諸法則に支えられ、宇宙・自然・地球環境によってゆるされる範囲でのみ実行される。

地球環境汚染、生態系破壊、資源問題などが深刻化し世界の耳目をひくなかで、この点は近年次第に強く認識されるようになってきている。経済とは自然的な行為であり、かつ人間的な行為であり、また文化的な行為なのだ。物資をめぐるたんなる人間的な行為・活動ではない。そのことを真に理解するようにならないと、経済学は、経済のことを本当に理解し理論化することにならない。また一般に向けて経済とは何か、経済の法則とは何かを正しく語ることにならない。その意味では古典派経済学、マルクス経済学、新古典派経済学などはいまだ不十分な学問でしかありえない。

これまでの経済学は、経済と(イ)天地自然との真の関わり、(ロ)人間本性との関わり、(ハ)人間の社会生活、文化、精神生活との関わりなどの重要な要素を欠落してしまっている。経済の一部分を切り取った学問でしかなかった。早い話が経済と人間の心や文化との関係を考究しない学問だった。

在来の経済学の在り方に対する反省は七〇年代頃から世界的に広がって、いろいろな努力がなされ、成果があがっている。ただし私見によれば、まだ真に新しくかつ体系的な経済理論は生み出されていないように見受けられる。そこで本稿は、この「新しい経済学」の形成にチャレンジすることを目標にして執筆されているのである。時あたかもソ連邦は解体し、アメリカの混乱は続いており中東地域、東欧の混乱も予断を許さない。日本について見ると、対外摩擦は深刻化の度合を深めている。世界史は確実に転換しつつある。

新時代への移行を予感するにつけ、本稿の執筆を促されているのが偽らざる心境である。

前述の(イ)(ロ)(ハ)は、次のようにも表現できる。

(イ)　天地自然とのコミュニケイション

(ロ) 人間本性をエネルギー源とする経済活動

(ハ) 他の人々ないしは他の社会集団とのコミュニケイション

(ロ)についてはのちに説明する。

さしあたり(ハ)について述べよう。

経済生活をロビンソン・クルーソーのように一人だけでするケースも絶無とはいえない。横井庄一さんも戦後二十余年間一人で生きつづけてきた。

しかし普通はなんらかの他の人との協力や交流をまじえながら経済活動をおこなう。分業や職務分担が発達している現代では、広範な社会的交流と結びつけて経済活動がおこなわれている。前近代の社会、例えば、いわゆる未開社会でも種族や家族が仕事を分担したり協力しあったりして生活している。具体的には男たちが狩りに行き、女性が住居の周辺で育児や家事労働をおこなうというようにである。

後者について見ると非常に判りやすいが、老若男女の別があり生活が営まれるが、互助がなければ暮らせないし、また協力し合う情感もある。協力し合い生活することによって、いわば同じ釜の飯を食う情愛も生まれる。他の動物との戦い、厳しい自然の中での生活、他の部族ないしは民族との対立に処することなど、人々は百数十万年の昔から協力し合って生活することを必要としている。協力・協同は手段でもあるが、そこから生まれる交流・コミュニケイションが人間の心を暖め、楽しくもするのである。

これは人類学や社会学、歴史学などが教える通りで、まさに「人間は社会的動物」である。人間の社会的な結合を強化する一因として、誕生から成人するまでに要する時間が他のいずれの生物や動物よりも極端に永いことがあげら

れる。そのため親子、家族・親族さらには社会集団の結びつきが極めて強くなる。親は永年にわたって子を育て、子はそのことを肌で感じる。男女両性の交流が婚姻という安定したかたちを取るのも、このことと大いに関係があるのだろう。

「人間はある意味で、発達のおくれた動物である。なぜなら、彼の誕生から、いつでも結婚できる成年までの時間のはばは、他の諸種に属する、ほとんど大多数の動物たちよりも、いっそう長いからである。人間が自分の種を生殖することができるように成長するまでの間に、馬なら老いさらばえて、放牧地に追いやられんばかりになってしまう。成人のになう負担からのこの解放は、その成長をはげます結果になる。自分のこの長い幼年期のおかげで、人間は、遊びと試みの時間、学ぶための時間、直接的環境だけではなく、自分の所属する種が記憶してきた経験をも理解する時間、はるかな未来を夢みる時間を見つけ出した。人間は青春期に、生存のための圧力を受けずにすませるから、彼は自己発展のためのレジャーに恵まれていた。この事実は、原始人さえも隣りあわせの動物から区別させる事実である。」（L・マンフィールド、久野収訳『人間―過去・現在・未来』（上）岩波書店　一〇頁）。

右のマンフィールドの言葉は味わうべき内容がある。ちなみにマンフィールドはまた次のように記す。

「動物から人間への移行は、表現と伝達のハケ口を求めている愛情、憎悪、恐怖、不安、笑い、涙などによって彩られた情念生活」、「記号や製作にあてられる物質」、「音楽的天分」、「遊び好き」、「技芸好き」、「まねる衝動、フリをする性質、満足した反応に記憶の中で立ちどまり、それを意味深いパターンにしあげる習慣」、「文化と呼ぶ〝第二の天性〟」

社会生活、組織を作っての社会生活、それに「文化と呼ぶ〝第二の天性〟」。これらに人間の生き方、人間社会の特

徴が良く表われている。のちにも述べるが、これらは他の生物にない人間の精妙な心や内面の精神性と強く結びつくものであるだろう。

人間の社会生活において、さまざまなかたちのコミュニケイションが極めて大切な意味をもつ。コトバという記号、シンボルの作成と使用によるコミュニケイションの重要性は良く知られる。ただし人間社会の絆となりコミュニケイションの要素となっているのは、コトバだけではない。次のようにいうこともできるだろう。人間の、あるいは人間社会の文化性の絆になっている他のコミュニケイションもあるのだと。

ちなみに文化人類学の泰斗ともいうべきレヴィ＝ストロースによると、未開社会において三つのコミュニケイションがあると指摘されている。

(1) 財のコミュニケイション
(2) 女性のコミュニケイション
(3) 言葉のコミュニケイション

(3)の言葉によるコミュニケイションについてはすでに述べた。

(2)の女性のコミュニケイションとは、家族・親族あるいは部族間で婚姻によって女性を妻として迎え入れることによって、コミュニケイションをおぎない、絆を強めるということである。このような意味合いでの婚姻・親族システムについては、文化人類学で詳しく研究がおこなわれている。社会学でも研究されてきたといってよいだろう。

今日、経済理論ないしは経済学の再形成を試みるうえで注目されるのは、(1)の「財のコミュニケイション」である。財の贈与や返礼あるいは貝殻貨幣の流通は人々の間、あるいは社会集団間のコミュニケイションを成り立たせている

という。事実このような財のコミュニケイションによって人々は結ばれ、争わず、むしろ和合しあう。人々が争わず戦わず、むしろ互いを信頼し、協調し、さらには協力して暮らす。

財は社会生活や政治生活の手段でもある。ユローク族の間では次のようなことがあるという。

「貝殻貨幣は約二七インチの長さであるが、人々はむさぼるようにこれを求め、熱を入れて蓄積した。社会の中で然るべき位置を占め、侮辱に報復し、娘を地位のある人士と結婚させ、自分に依存する者たちを独自に引き連れる権利をめぐって、人々が互いに競い合うとき、その手段は他ならぬ貝殻貨幣であった。」（メアリー・ダグラス、浅田彰・佐和隆光『儀礼としての消費』一五七頁）

財貨は経済的な財でもあるが、同時に社会的財でもありえ、政治的財でもありうる。また装飾品や芸術品など文化的な財でもありうる。

山野で狩ってくる獲物にしても、果実にしても、それが弓矢や篭などの道具を使い獲得され、火を燃やし汁器器具を用いて調理される。人々はコトバを用いてコミュニケイションをおこなう。食物や衣料にしても、他の動物には見られず人間のみが獲得・利用する類のものになっている。したがって、現代はもちろんのこと、百万年以上前から、経済行為ないし経済は文化的なる活動であった。

のちに交換ないしは市場経済との関係で詳しく述べるが、伝統的社会において贈与とそれに対する返礼の義務が社会の成員を結びつける大切な要素であったことは、文化人類学によって広く知られている。また、ポラニー（M. Polany）やサーリンズ（M. Sahlins）らの経済人類学によってこれらのことが探求されている。

このようなゆるやかな「互酬性」の原理は経済活動を支えるものであったし、同時に社会的結合を支える原理でも

あったろう。その意味では、「財は社会関係を作り出し維持するものでもある」

あるいはまた次のようにいえるかもしれない。贈与と贈与に対する返礼つまりゆるやかな「互酬性」は、社会ないしは集団を支える要ともいえる原理になっており、経済活動にもそれが働きかつそれがまた社会的な結びつきを強化する原因にもなっている。

ちなみに一言すれば、現代の資本主義経済（capitalism）ないしは市場経済（market economy）では等価物に対してのみ財を譲り渡すという原理が働いている。このばあいの譲渡は贈与とは原理的に異なる。さらに進んでいえば、現代の交換ではできる限り少なく渡してできる限り多く得る、その意味で相手の分をできるだけ削って自分のものにするという心理や意識が根底で働いている。少なくともそういうケースが大部分である。

したがって、市場経済ないしは商品経済は、贈与による経済ないしは贈与と返札を原理にする経済とは原理を異にする。

ポラニーによると、伝統的社会では「互酬性と再配分」が経済の原理である。

「無償の贈与」が経済行為の大切な要素になっており、交換の目的（唯一の）は互酬性の強化である。（マリノウスキー）

贈与や、互酬性つまり相互奉仕ないしは互助の心と行為が経済活動の重要な要素になっている。

このような点に注目すると、経済行為あるいは経済活動は、財をめぐる活動でもあるけれど、社会生活をし集団を作って生きる人間にとって、人々を心理的に結びつける重要極まりない要素ともいえる。

未開社会ないしは伝統的社会において、人々は厳しい自然条件の中で、他の動物・生物や他の社会集団との強い緊

張のもとに生きることを強いられている。そのためにつねに社会的な結束を固めることがもとめられている。規範・ルール・慣行も重んじられる。経済行為を贈与や互酬性を原理に実行することは、経済が生存のための食料や衣料や住居、各種の道具を作る活動であるだけに、社会集団の統合の極めて重要な要素になる。「財は社会関係を作り出し維持するものでもある」（メアリー・ダグラス『儀礼としての消費』新曜社）という立言が意味をもつゆえんである。

㈱「贈物とは、すなわち結合であり、連帯、一帯化であって」「社会契約の未開における類同物は、国家ではなく贈物にほかならない…」（サーリンズ『石器時代の経済学』山内昶訳　法政大学出版局二〇二頁）

これまで大部分の経済学では、経済とは財貨（サービス）を取り扱う、いわば物的な資源利用などの活動だと解釈し教えてきた。

経済とは人間の心理や文化性や社会生活・集団・政治・法などとは、質が異なるものと教えてきた傾向がある。またそのような経済観が広まっていた。

どの学問でもありがちなことだが、本来、多数の要素が複合化し渾然一体となって存在するものの部分を、ハサミで切り取って一元化し、モデル作りに励む。できあがったモデルはきれいでエレガントではあるけれど、実際とはかなりズレた画像になってしまうことが少なくない。経済学ではそれがとりわけ甚だしかったように思う。

社会学者パーソンズは、社会体系の在続要件として、(1)環境への適応、(2)目標の達成、(3)成員の統合、(4)成員の要求満足と動機づけという四つの項目をあげている。

伝統的社会の経済の運営は、「無償の贈与」といい、「再配分」（ポトラッチ）といい、「社会存続の機能的要件」としても強力に作用していたことがわかる。

経済活動とは何かという本章のテーマに、ひとまずここで結論を出しておくことにしよう。

経済とは新古典派経済学が教えるような、たんなる財貨や資源をめぐる活動ではない。それは文化・社会・政治・思想・技術（科学）に強く関わる、いわば社会文化活動なのである。

この命題が確認されれば、レヴィ＝ストロースが、言葉によるコミュニケイション、女性（婚姻）によるコミュニケイションにならんで、財によるコミュニケイションをあげていることの意味が良くわかる。財によるコミュニケイションによって、社会の結合ないしは統合をはたしてきたのは人類の知恵と本能なのである。

上記の命題は、現代さらには二十一世紀以降の経済原理ないしは経済理論を説く場合の土台に据えられ、かつ主柱となりうる。前述の通り本稿が目指すのは、新しい経済学という建物を建造することである。

第四章　経済一元論についてのコメント

経済をおおむね物的な活動として理解する点では、新古典派、古典学派、マルクスの経済も軌を一にしている。

ついでながら、ここでいわゆる史的唯物論とりわけその経済自律性論について批評しておこう。

いわゆるマルクス主義、さらにはその継承としてのレーニン主義や毛沢東主義などを評価する手掛かりになる論点なので、あえて記する価値があると思う。というのは、それが十九世紀から二十世紀の各国や世界を方向づけてきた極めて有力な理論ないし思想だったからである。

一九一七年のロシア革命、一九九一年のソ連邦解体とCISの動向、東欧諸国の政経改革、市場経済への移行。第二次大戦後のスーパー・パワーであるアメリカ合衆国の混乱と動揺や後退の見られる今日、上記の思想の意義をきちんと確認しておくことが大切である。

端的にいえば、この思想の大なる影響がなければ、ロシヤ革命や中国革命もなかったし米ソ対立（核兵器をともなう）もなかったろう。また、資本主義の下での無軌道な経済成長（資本蓄積を軸にする）が人類の存続を脅かすほどまでに、大気を汚し、海水や河水を汚染し、オゾン層を破壊し、温暖化現象をもたらすこともなかったろう。

共産化ないしは国有化とは別の方向でもっと早く、資本主義の弊害を是正する方向に世界も日本も進んでいたかもしれぬ。単純化していうと、市場経済の資本主義的方式は第一次世界大戦頃すでに限界にゆきあたっていた。その後は各種の戦争とケインズ政策の実行と自動車社会化（アメリカ的なモータライゼイション）に象徴される欲望と消費の煽動、つまり地球資源の濫費による大衆消費社会化で資本主義は持続されてきたといえる。

それによって大企業は資産を蓄積してきたが、GNPの累積的な増大、経済発展ということが喧伝されることとはうらはらに、筆者がいうマイナスのGNP生産と、マイナスのストック(資産)形成は巨大である㈱。このまま進めば、途上国がますます資本主義化し、CISや東独が市場経済に移行し、実質的には資本主義に戻り効率性や成長率のアップを図ることに熱中するだろう。

㈱　拙著『新生日本への道』（御茶の水書房）第二章「第三の道・友愛主義社会のヴィジョン」を参照

世界人口は一九五〇年に約二五億人であったものが、二〇〇〇年には六二～六三億人に増加するとも推定される（経済企画庁編『二〇〇〇年の日本』二七頁）。

このような資源濫費、環境汚染、生態系破壊の社会システムが、いかに技術的努力・向上によってその破壊作用を緩和するにしても、今後何十年、何百年と続くことはありえない。このまま資本蓄積や経済成長を続けようとすることは、やがては人類の破滅にゆきつかざるをえない。人類の経済活動が地球という惑星のパイを食いつくしてしまうのである。これは中期的な政経摩擦・対立や景気の上下変動とは別に確実にいえることである(注)。

のちにも述べるが、資本主義の経済制度を改革することができぬ限り、やがて人類は死滅することになる。

(注) 拙著『新生日本への道』（御茶の水書房、第一章、二章参照）

新古典派の経済学やケインズ主義は資本主義的市場経済の合理性を巧みに讃美し、このシステムを正当化するか、このシステムの政策的な調整が可能なことを説き聞かせている。

その点では、人類が物欲の迷いから覚めて資本主義から抜け出すのを妨げる麻薬の役割を演じているといってよいかもしれない。人々が今日のように日常の財貨とサービスの消費と蓄積という物的な「快楽」や娯しみいわば煩悩に麻痺した日を送っている限り人類は、確実に一歩一歩破滅の方向に進んでいる。そういって決して過言ではないだろう。

これも元を糺せば、人類がこれまで脱資本主義の正しい思想を発見できなかったことに大きな原因がある。マルク

ス主義ないしはマルクス・レーニン主義という誤った思想に影響され攪乱・分裂抗争・挫折の道を辿ったために、「脱資本主義」の正しい前進ができなかったのである。マルクス・レーニン主義は実は、見かけと逆の資本主義擁護の思想であるか、専制社会への復古の思想・理論でしかないともいえる。マルクス・レーニン主義はそれが唱えている言葉や志に反して人間解放（エマンツィパツィオーン）に逆行する思想であることを、われわれは今は勇気をもって理解しなければならぬ。ソ連邦や東欧での社会主義の崩壊は、偶然のことではなく、その歴史的な実証になっているといえるのだ。

繰り返していおう。ソ連邦の解体や東欧の脱社会主義はマルクス・レーニン主義の革命理論の誤りを実証した出来事だということだ(注)。

(注) 主義は正しかったがやり方が違っていたと解するのは、有害ないい逃れであろう。

生産手段（資本や土地など）の国有化と大規模計画経済は、君主制ないしは官僚制国家への復古主義でしかなく、ミーゼス、ハイエク、ウェーバーらの批判が正しかったのだ。そして本稿が現代社会の分析と諸学・諸思想の批判と新命題の定立によって説く通り、資本主義の改革、脱資本主義の思想・理論は、現代での「経済学批判」を通じて明確に定立できる。

マルクスは十九世紀の中頃に古典派経済学の検討と自らの命題の定立、いわゆる「経済学批判」(Kritik der Politischen Ökonomie) を実行して、経済学の革新、社会思想の革新、世界観の革新を実行した。それが『資本論』に結実した。

現在、資本主義の害悪によって「人類の存続」（ゴルバチョフ）が疑問視され、当然ながらそれが人類の最大の課題になっている。これまで重大視された貧困や恐慌（不況）も重要ではあるけれど、この最大の問題の登場の前には従の位置を占めるものに変わった。資本主義の害悪は（それに共産主義の害悪は）、核戦争（核拡散も含む）と地球環境破壊という爆薬（ダモレスクの剣）を人類の頭上に吊り下げたのだ。

これは疑いもない事実で、これを除去することが人類の最大の課題であるし、真の人間解放（エマンツィパツィオーン）に通じるのだ。

資本主義の悪についてはのちに詳述するとして、共産主義の悪にもわれわれは注目しなければならぬ。

これは、マルクスやエンゲルスの経済学批判が大事なところで間違えていたことの結果に他ならない。

この大変動と混乱の時代に、どうしても実行しなければならぬのが、現代（二十世紀末）での「経済学批判」の作業の実践なのだ。

新古典派経済学、ケインズ経済学などの効率万能主義、成長至上主義の経済学だけではなく、マルクス流の経済学や旧ソ連・東欧の経済学をも含めた「経済学批判」なのだ。

マルクスによる経済学批判・哲学批判は残念ながら失敗したのだから、あらためてその後百数十年の経済学の発展成果をも吟味検討の対象として、あらたに現代の経済学批判を遂行する作業こそ、人類とその未来のためにもとめられている事業なのだ。

さて、前に触れた経済自律性論について述べよう。

いわゆるホモ・エコノミックス（経済人）を想定することから諸説が組み立てられる現代の新古典派綜合において

も、大枠において、経済自律性論がとられている。経済は財貨やサービス・資源にかかわること解して、自律し、自律的に動くと考えられている。いわば経済帝国主義論である。

マルクスの見解はもっと徹底しており、経済は物的活動としてそれ自体として自立する、経済は経済として純粋にありうると考える。

マルクス、エンゲルスらはさらに経済決定論を説いている。経済のあり方が政治・社会・思想・文化・観念・宗教などの他のすべてを究極において規定する。これらすべてのものは経済の反映物だと考える。その理由は経済活動によって人間・人類が生きているということを離れては、観念も思想もありえないからだという。

経済の在り方を決定するのは生産力水準（技術・生産手段の質と蓄積・算出量）であり、その水準いかんによって、社会制度や思想・観念も変わる。

生産力は低い水準から歴史的に段階的に上昇する。未開の状態から文明の時代へ、だが、これまでの歴史時代（古代・中世・近世現代）は階級社会であって、このように階級社会にとどまっているのは生産力水準がまだ相対的には低位だからである。

生産力水準がもっと上がれば、社会は非常に豊かになり余暇も増えるので、人類は幸福に暮らせるようになる。したがって生産力の向上に適合する資本主義にかわる生産様式・生産関係（いわば経済制度（共産主義））を建設すべきだと主張する。

つまりマルクスやエンゲルスの思想も生産力至上主義、物的豊富＝幸福主義といえる。この点は資本主義の観念と軌を一にする。いわば唯物論的な資本蓄積と科学技術万能主義である。

ところでそれぞれの生産力発展段階に対応して、それぞれの生産手段の所有関係を土台に人々の生産関係が成立する。各生産関係が社会の経済制度のタイプを決定する。これらが、いわゆる社会の「下部構造」である。そして、この下部構造に対応して政治・社会・法律・思想・文化などの「上部構造」が成立する。

この「下部構造—上部構造シェーマ」がいわゆる史的唯物論のエッセンスである。少し長くなるが引用しよう。

「私をなやませた疑問の解決のためにくわだてた最初の仕事はヘーゲル法哲学の批判的検討であって、その序説は、一八四四年にパリで発行された『独仏年誌』に掲載された。私の研究はつぎのような結末に到達した。すなわち、法律諸関係ならびに国家諸形態というものは、それ自体によっても、またいわゆる人間精神の一般的発展からも、理解されるものではなく、むしろそれらは、物質的な生活諸関係——それらの総体をヘーゲルは一八世紀のイギリス人とフランス人の先例にならって「市民社会」〔bürgerliche Gesellschaft〕という名称のもとに総括している——に根底をもっているということ、だがこの市民社会の解剖はこれを経済学のうちにもとめるべきであるということであった。私は経済学の研究をパリで始めたのであるが…」（『経済学批判』国民文庫社　九頁）

ここにも語られている通り、マルクスは法律学や哲学その他の研究から始め、焦点をしだいに市民社会の解放、経済学の研究にしぼって行ったのである。そしてすべての淵源を経済に生産力に、そして、人間労働に還元して行った。

「私の到達した、そしてひとたび自分のものとなったのちは私の研究の導きの系となった一般的結論は、簡単につぎのように定式化することができる。人間はその生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した関係、生産関係にはいる。この生産関係は、彼等の物質的生産力の一定の発展段階に対応する。これらの生産関係の総体は社会の経済的構造を形づくる。これが現実の土台であり、そしてそのうえに法律的および政治的な上部

構造がたち、そしてそれに一定の社会的意識諸形態が照応する。物質的生活の生産様式が、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を条件づける。人間の意識が彼らの存在を過程するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を決定するのである。社会の物質的生産力は、その発展のある段階で、その生産力が従来その内部ではたらいてきた現存の生産関係と、あるいは同じことの法律的表現にすぎないが、所有関係と、矛盾するようになる。これらの関係は、生産力の発展のための形態からその桎梏にかわる。そのときに、社会革命の時代がはじまる。経済的基礎の変化とともに、巨大な全上部構造が、あるいは徐々に、あるいは急速に、変革される。このような変革の考察にあたっては、自然科学の正確さで確認できる経済的生産条件における物質的変革と、人間がこの衝突を意識しかつこれをたたかいぬくところの法律的・政治的・芸術的あるいは哲学的な、つまりイデオロギー的な諸形態とを、つねに区別しなければならない。」（『経済学批判』序言）

この有名な文章には、マルクスの思想がじつに巧みにかつ適確に記述されている。

① 物質的生活の生産様式が、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を条件づける。

② 生産関係・経済構造は、意志や精神やイデオロギー、政治的・社会的な諸事実とは独立に成立する。

③ 社会の物質的生産力が生産関係、社会の経済的構造を規定する。

④ 人間の社会的存在が意識を規定する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではない。

経済的下部構造が、いわゆる上部構造を決定する。生産力の発展が下部構造を規定し、したがって上部構造を規定する。これがいわゆる史的唯物論である。

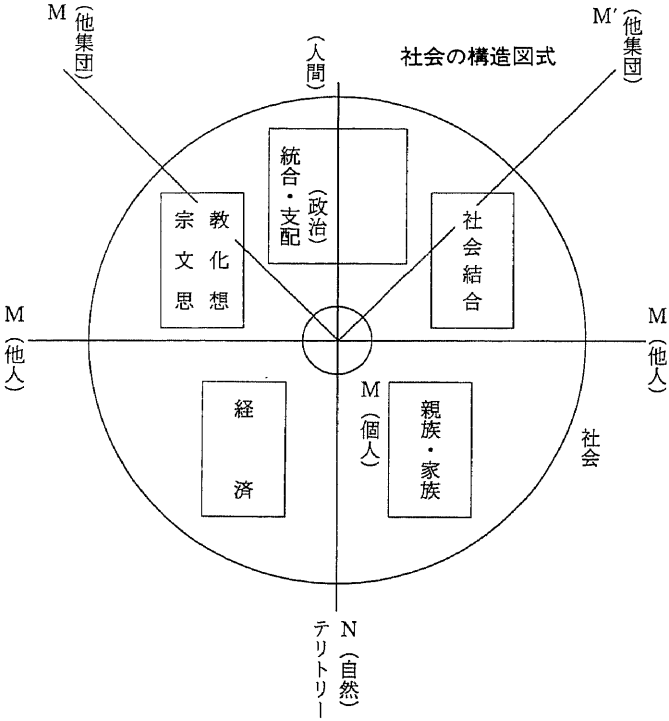
④は唯物論の存在論、ないしは世界観にあたる。

以上からわかる通り、マルクスは非常に徹底した経済自律論をとっており、その点は新古典派や古典学派よりずっと徹底している。しかし、経済を人間の各種の意識や政治や社会関係と無関係に自立して存在すると解するのは、モデル論としてはともかくとして、やはり無理がある。

経済理論はもともと経済を純粋に取り出そうと抽象して作られており、一種のこしらえ物である。そのうえ本稿が示すように、大部分といってよい程に、要点を見落としたモデル形成といえる。

また下部構造↓上部構造のシェーマも、普遍的な命題としては成り立たない。生産力水準決定史観ともいえる史的唯物論も、非常に無理な一元的決定論である。

筆者はこれまで歴史観・社会観の研究をおこなってきたが、その結論として作成した社会構



造の図式を次に記そう。

社会は図のように多元的複合的な構造をもっている。先歴史時代あるいはいわゆる未開社会でも、現代でも、この点にはあまり変わらない。

このような社会ではこれらの要素が複合化し、絡みあっている。歴史時代あるいはいわゆる文明社会では、政治・経済・社会・宗教・思想・文化などが、それぞれ大規模化したり組織化したり体系化されたりして、個性化し特徴がはっきりしてくる。しかし互いに絡みあっている。

近代・現代では、それぞれがさらに発展し個性化するというようなことが起こっている。その大きな原因が、市場経済・資本主義の発展による経済の相対的自律化の動きである。そしてそれが経済は、政治・社会・文化・宗教などとはまったく別のシステムだという解釈の根拠になったことも事実である。

だが、現代でも経済とこれらの要素が複雑にからみあっていることは否定できない。経済はいぜんとして、これらの他の要素や側面を含んだ行為でもある。逆にいえば政治・法律・社会・文化・思想なども経済と相互浸透しあっている。そして、資本主義的な思想や文化や政治や社会や親族関係も存在するようになっている。

なお、社会を規制するものとして、人間（ヒト＝M）の本性や対人関係、対自然関係というベクトル、つまり社会・経済・政治の担い手である個人（人間）や人間を包み支えてくれている宇宙・地球の力も忘れるわけにはいかない。

新古典派経済、ケインズ経済学、新古典派綜合、マネタリズム、マルクス経済学など大部分の経済学は、この点の問いつめをあまりしていない。M（ヒト）分子、M—Nベクトルつまり人間—自然（宇宙）関係の本格的な検討が欠落しており、これが致命的である。さらにいえばM—Mベクトルつまり、本格的な、対人、集団・社会関係のベクト

ル（文化人類学や社会学）が抜け落ちており、これも大きな欠陥である。

このことは、地球環境問題・生態系の維持・資源問題（各種金属やエネルギー〈石油その他〉）やベトナム戦争・湾岸戦争などが、重大な社会問題になっている現在、痛感される欠陥である。

経済学が真の本格理論へと飛躍するには、これまでの狭隘ともいえる視座から抜け出さねばならない。これまでの経済学なじみの思考のフレーム・ワークから抜け出さねばならぬ。これまでのおびただしい経済学の著作にない、新しい思考のフレーム・ワークを、過去の経済学（スミス・マルクス・ケインズに象徴される）の常識にない新しい思考のフレーム・ワークを、私共人類は生き残りのために創出し獲得しなければならない。

本稿は経済学上のパラダイム転換を目標にして執筆されており、新しい経済学の形成を目標にして書かれている。

ひとたび新しいパラダイムが確立されると、その目から見れば、これまでの人類が思考の拠り処にしていた考え方、見方がいかに古風なものであったか、したがって私達はいかに古風で陳腐な物の見方で、判断し論じ、行動してきたかが良くわかる。パラダイム転換とはそのようなものである。

ついでに記すなら感じとして、政治学・社会学・法学その他多くの学問にも、このようなパラダイム転換がもとめられているようにみえる。ひとり経済学だけが狭い視野に閉じ込もっていたわけではない。むしろ、経済学ではもっとも丹念に彫琢が加えられ、精緻な体系が作りあげられている、にもかかわらずその経済学について上述のようなパラダイム転換がもとめられているということである。

十九世紀の中頃マルクスは当時の経済学を吟味・検討し、「経済学批判」をおこなって、新しい経済学（世界観、哲学その他も）を造り出した。そのような作業、つまり現代の経済学批判が今日あらためて必要になっている。十九世

期の経済学批判の成果に安住していられないことはいうまでもない。ソ連邦の解体つまり「ロシア革命」の失敗がこの必要性の巨大な実証だったといえる。

第五章　唯物主義の信仰

現代において、あるいは間もなく始まる二十一世紀以降において経済学を考えるには、宇宙・地球・ヒト等について考察することから始めなければならない。経済成長にしても、企業活動にしても、消費生活にしても技術の開発やその利用にしても、それが繰り広げられているのは、宇宙の中で、地球上であり、かつ人間（ヒト）を担い手としておこなわれているものでしかないからである。

経済行為、経済活動、もう少し範囲を広げていえば政治、国際関係、戦争、科学・技術の発展にしても、所詮は宇宙・太陽系・地球・生態系・人間等の建物の中で演じられている、いわば一場の演劇とでもいえるものだからである。

宇宙や太陽系の目、あるいは何十億年の地球の歴史の中でいえば、ソ連邦の解体、ブッシュ大統領の世界新秩序、パックス・アメリカーナの弱体化、〇〇戦争、ＥＣ、日本の経済膨張、経済・政治成長至上主義、科学技術の絶対視（一種の信仰）などは、ほんの一コマの、しかもあまり賢い演劇とはいえないいわば茶番劇であるだろう。

現代の地球に住む人類は愚かな信仰と自らの業（さが）にとりつかれ狂いまわっている生物だともいえる。

現代のアメリカ的な合理主義は、宇宙悠久の歩みから見ると途方もない感ちがい、錯覚である。人間の本来の生き方を見失ったみじめな考え方、フィーリングで現在の日本の人々も日々生きている。日本だけではない。旧ソ連、東欧の人々も含め、人類の大多数が狂ったような快楽耽溺指向で、貧婪の笑えぬ茶番劇を演じている。

そのために人々は互いを傷つけあい、互いを疑い、ついに人類の「存続」が危ぶまれるところまで地球環境を汚し、他の生物を傷つけ滅ぼし、資源を乱費し核戦争をも含む大戦争をおこなう、場合によっては、ふたたび三〇年代の大恐慌ないしは第二次世界大戦に匹敵する世界大戦さえひき起こしかねない。そうした世界情勢である。

過労死に象徴される勤労者の酷使（これは資源の効率的利用・パレート最適・資源の最適配分というような新古典派の非倫理的な命題によって正当化されている）と結びつく対外競争力の強さで、日本経済はバブル的な膨張をとげてきた。これは他国の経済成長を削り取って高成長してきたことを意味する。

それだけに、欧米諸国の日本を見る目は厳しくなり、ジャパン・バッシングは激しくなる。またEC、米加墨協定など、ヨーロッパでもアメリカでもブロック化、保護貿易主義が抬頭している。いきおい日本は「アジアにこそ活路」と、太平洋圏に目を向け経済的・政治（軍事）的な影響力（支配）を行使しようとする（自衛隊の海外出動行動）、これに対しては、韓国・中国をはじめとする東南アジアでの対日警戒感が強まる。（日本は「戦争責任」を反省していない）

日本が経済的進出につづいて、政治大国化を狙いその裏づけとして、自衛隊の海外派遣をおこなって行けば行くほど、長期的には国際的に孤立化して行くおそれがある。

日本のこの行動も愚かな茶番劇の一つであるかもしれぬ。相対的な経済的繁栄に安住し、各種のメディアのしばしば権力にすり寄る報道や為政者のプロパガンダやパフォーマンスで自らの思考を妨げられているか、勘違いさせられているか、真の思考と行動の努力を怠っている多くの人々の姿も、考えさせられる現実である。わが日本は政治大国化しようとしながら、かえって孤立化の再度の失敗の道を歩むおそれがある。

いずれにせよ、二十世期末の世界の政治・経済・文化・社会の情勢は混乱の極みにじりじりと近づいているような剣呑な情勢である。

地球上で繰り広げられている世期末的な、ないしは終末論的な叫騒とカオス（渾沌）も、もとを糺すと人類が宇宙・地球・人間いわば、天地人の視座からする真の理法を知らず、あるいは忘失し去って暴走していることから発しているといえるだろう。

経済成長至上主義、物的富の無限追求、内外での政治・社会的な権力の無限追求―米ソの権力争い、諸大国の権力争い―が現代の人類社会の文化（カルチャー）である。これは人類史全体を見渡してもかなり特殊でかつ特異な文化である。あるいは本来は文化といえないものが、文化然として正当化されている(注)。

(注) 拙稿「友愛主義社会の思想について―新文明への誘い」（筑波大学大学院経済学会『筑波大学経済学論究』一〇号）

近・現代の世界の人類にこのような文化が入り込むについては、新古典派経済学もマルクス経済学も遡っては古典派経済学も非常に大きな役割を演じてきた。

それらは立場こそ異なれ、あるいは異なるようでありながら、ともに財貨こそが富であり、物的な富の追求が大切だという価値観を理論化し、公衆に教えてきた。物こそが大きな価値があることを説き、物質を神として崇めることを教えてきた。

つまり物こそが神であると教化する偶像崇拝の信仰であったともいえるのである。それが資源の効率的利用を他の

すべてに優る価値だと考え、そう教える。また経済成長至上主義という信仰を説き、技術的進歩至上主義・万能主義を公衆に教え教化活動を繰り広げている。マルクス主義のサイドも大同小異で生産力発展至上主義―技術進歩と資本蓄積至上主義を教えてきた。

ともに財貨や物を神として崇めるという世界観ないしは人生観あるいは生き方を採用している。これは十八・十九世期の産業革命以来の科学主義の延長上にある思想である。こう述べると読者はすぐ次のことに気付かれるだろう。巷に書店に氾濫している経済学やさらには経営学、会計学は、多くがそのような世界観ないしは信仰の無数の教典なのだと。

このような価値観をとる在来の世界の経済学に代わる新しい経済学、「現代の経済学批判」が終末の世ともいえる今は必要である。いわばパラダイム転換がどうしても実行されねばならぬ、さもないと、この唯物主義によって文明と地球と人間と諸生物は食い荒され人類は滅びかねない。筆者は四十年余にわたる経済学研究(及びその他諸学の研究)と思索を通じて、その結論に到達したのである。